養老の宝篋印塔

ようろうのほうきょういんとう

文化財愛護シンボルマーク

名　称	養老の宝篋印塔	所 在 地	平荘町養老 592 番地
別　称	石造宝篋印塔、養老天満宮の石造宝篋印塔、芝天満宮の宝篋印塔	所有者等	養老町内会
		指　定	兵庫県指定文化財
数　量	１基	指定分類	建造物
寸　法	現高 99.3cm（基礎－笠部）	指定名称	石造宝篋印塔
材　質	石造、花崗岩製	指定年月日	昭和 50(1975)年３月 18 日
時　代	南北朝時代　応安３(1370)年		

養老の宝篋印塔

平荘町養老地区の東部、江戸時代に芝村と呼ばれたところに、養老天満宮があります。その境内の北東奥に小型の石造宝篋印塔が建っています。

宝篋印塔とは、基礎、塔身、笠、相輪からなる塔の一種で、笠を段形につくり、軒の四隅に隅飾を立てた形をしています。宝篋印塔という塔の名は、宝筐印陀羅尼の経文を納めたことから名づけられたといわれ、主に供養塔や墓碑として造立されています。

基壇は、一重の反花式です。現在は木の根に押さえられほとんど地中に埋まっています。

基礎は、上部に二段を造り付け、各面に輪郭を巻き格狭間を配し、それぞれに開蓮華を陽刻しています。

塔身には、金剛界四仏の種子が大きく陰刻されています。なお、種子の周囲に月輪はありません。通常は北面にある種子「アク」が南面にあるので、一般的な向きと比べ、現状は180度ずれています。

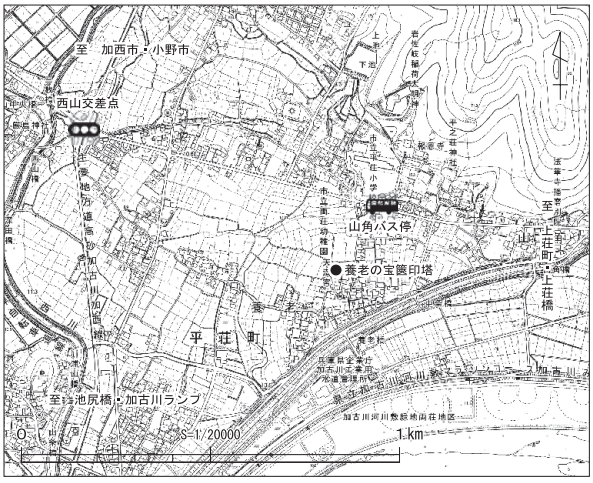
笠は下二段・上六段の定型式です。上部が損傷した隅飾は二弧輪郭付きで、その中に月輪を陽刻し、胎蔵界大日如来の種子「ア」を刻んでいます。

相輪は欠失しており、現在は別のものと考えられる相輪が置かれています。

この塔の基礎西面の左右の輪郭上には「融通百万遍結衆」「応安三年十月日」と、各一行計十四字の銘文があり、融通念仏の講衆によって建てられたことがわかります。

この石塔は、南北朝時代の応安３(1370)年の銘文があり、優れた技法によって造られた花崗岩製の宝篋印塔として興味深いものです。

なお、芝の天神さんとも呼ばれているこの天満宮には、菅原道真が大宰府に流される途中、嵐に遭い別府の浜に漕ぎ着けた時、芝村に暮らしていた道真の乳母と再会し、その時に詠まれた短冊が伝わっているという伝説があります。

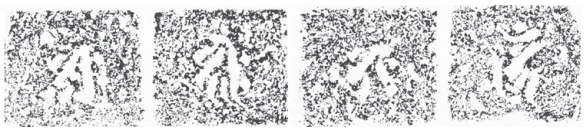


［各部寸法］

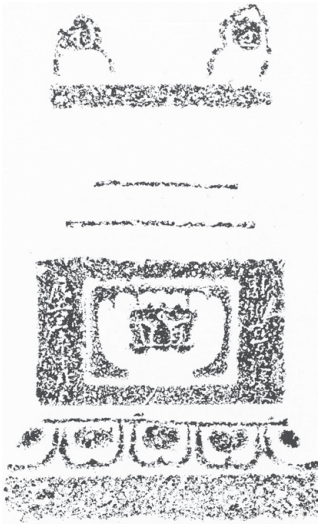
笠部	高 35.3cm、下端最大幅 44.7cm （隅飾高 各 15.0cm）
塔身	高 24.8cm、各辺 25.9cm
基礎	高 39.2cm、各辺 48.2cm
基壇	高 17.5cm、各辺 61.8cm

（文・写真・採寸／宮本）

塔身種子拓影



アク	キリーク	タラーク	ウーン
不空成就如来	阿弥陀如来	宝生如来	阿閦如来



笠・基礎・基壇拓影

拓本／『加古川市史第7巻』から転載

●参考文献
『郷土のおはなしとうた 第２集』加古川市教育委員会(1975 年)
『昭和 49 年度指定兵庫県文化財調査報告書』兵庫県教育委員会(1975 年)
『加古川市史 第７巻』加古川市(1985 年)

●キーワード
建造物　石塔　宝篋印塔　種子　開蓮華　養老　芝　天満宮　花崗岩　応安３年

●所在地／兵庫県加古川市平荘町養老 592 番地

●交　通／ＪＲ神戸線「加古川駅」南口発神姫バス「都台」行「山角」バス停から南西へ徒歩4分
車は加古川バイパス「加古川ランプ」から北へ5.5km

編集発行：加古川市教育委員会 文化財調査研究センター
令和３年３月 31 日(2021.03.31／1000)